

Title	マツバガイ(軟体動物門, 原始腹足類)の大形個体
Author(s)	久保田, 信; 鳥越, 兼治
Citation	南紀生物 (2000), 42(2): 99-100
Issue Date	2000-12
URL	http://hdl.handle.net/2433/188279
Right	© 南紀生物同好会
Type	Article
Textversion	publisher

マツバガイ (軟体動物門, 原始腹足類) の大形個体

久保田 信*・鳥越 兼治**

Shin KUBOTA and Kenji TORIGOE: Big individuals of *Cellana nigrolineata* (Mollusca, Archaeogastropoda)

本州・四国・九州沿岸に分布するマツバガイ *Cellana nigrolineata* (REEVE) は、殻長 75 mm・殻幅 60 mm に達するとされている (波部, 1973; 中村, 1989)。本報告は、本州と四国の計 3 地点から採集したこのようなマツバガイ 3 個体についてであり、最大個体についてはサイズとともに採集記録を示した。

久保田は 26 年前に本種の“最大個体 (殻長 76 mm・殻幅 62 mm)”を愛媛県宇和海の潮間帯から発見し採集した。それ以降、日本各地での調査・観察の際には必ず注意を払ってきたところ、近年、和歌山県白浜町から上記の個体よりさらに大形の個体を発見した。

これら白浜と宇和海の大形個体を観察した鳥越は、彼が維持管理している「稲葉貝類コレクション」に保管されているマツバガイの最大個体 (殻長 78 mm・殻幅 61.5 mm) が、今回の白浜産のものに匹敵することを見出した。その個体は、瀬戸内海の向島、観音鼻から稲葉明彦先生により 25 年前に採集されたもので、上記の宇和海の個体よりやや長めであった。以下に日本最大のマツバガイを記録する。

日本最大のマツバガイ (図 1, 2)

殻長・殻幅 80 mm・68 mm
 採集地 和歌山県白浜町瀬戸漁港コンクリート岸壁
 採集日 2000年 4月13日
 その他 殻頂から多数の褐色の放射細帯が走る。殻の表面には付着生物が見られ、多数個体のヤッコカンザシ *Pomatoleios kuraussi* (BAIRD) をはじめ多数のフジツボ類, 1 個体のマガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG), およびカサガイ類の一種の 1 個体を確認した。これらの付着生物はすべて生きていた。

考 察

白浜町瀬戸漁港では、付着基盤が平らな岸壁であるため殻がほぼ完全に密着でき捕食者からの攻撃に強い、お

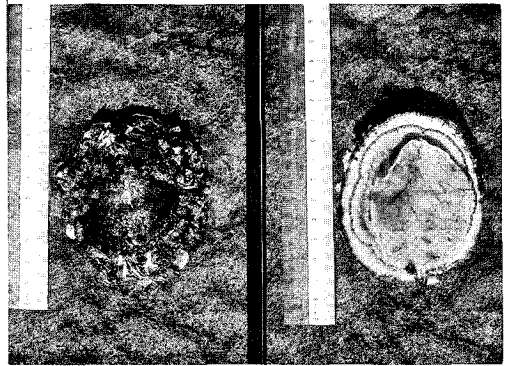


図 1 和歌山県白浜町瀬戸漁港で発見されたマツバガイの巨大個体 (A: 背面; B: 腹面)

Fig. 1. Giant individual of *Cellana nigrolineata* from Seto Port, Shirahama, Wakayama (A: dorsal view; B: ventral view).



図 2 和歌山県白浜町瀬戸漁港に生息するマツバガイの大形個体 (図 1 に示した巨大個体以上に多数の付着生物が殻上に着生)。

Fig. 2. Big individual of *Cellana nigrolineata* from Seto Port, Shirahama, Wakayama (Many sessile animals are growing on the shell surface than the giant individual that shown in Fig. 1).

* 京都大学大学院理学研究科附属瀬戸臨海実験所 (〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町) Seto Marine Biological Laboratory, Graduate School of Science, Kyoto University, Shirahama, Nishimuro, Wakayama 649-2211, Japan

** 広島大学教育学部 (〒739-8524 広島県市鏡山1-1-1) Faculty of Education, Hiroshima University, Kagamiyama 1-1-1, Higashihiroshima, Hiroshima 739-8524, Japan

よび、殻上に多数の付着生物が生息することで人に発見されにくくなること、などの理由により上記個体は成長の極みに達したものと思われる。この岸壁には他にも大形個体が少数生息しており（図2）、最大個体のように多数の付着生物が着生・成長しているものも見られた。ただし、付着生物のために重量が増加するのは、摂餌などの移動時に欠点となるであろう。

一方、白浜町番所崎周辺海域の岩礁からは、これらほど大形の個体は発見されていないし、打ち上げ個体の中に、今回記録したような大形のもの確認されていない（久保田、未発表）。番所崎では、基盤の凹凸のため捕食者に食べられ易く、発見される大きさに限度があるものと思われる。

ところで、田中（1978）は、東海区水産研究所構内のコンクリート性小形水槽で、最長8年間で成長し老衰死した巨大なマツバガイを報告している。殻径10.1 cmで上記の野外個体よりさらに大形であることは注目される。

謝 辞

向島産のマツバガイについて、当時の情報を教えて頂いた稲葉明彦先生に深謝致します。また、コンクリート水槽で生育した巨大マツバガイの情報をご教示下さった田名瀬英朋氏と採集の便宜を計って下さった白浜漁業協同組合に感謝致します。

引用文献

- 波部忠重. 1973: 新日本動物図鑑 [中], 4版. p. 23, 北隆館, 東京.
- 中村 宏. 1989: ツタノハガイ科. *in* 奥谷喬司編・監修, 決定版生物大図鑑 貝類 (第2刷). pp. 36-37, 世界文化社, 東京.
- 田中弥太郎. 1978: マツバガイの最大形の記録. ちりぼたん, 10(1), 7.

